

知識の再確認にもおすすめ IT資格&試験ファイル

新連載

第1回

情報技術の基礎知識を問うITパスポート試験

大口 聡

ソフトウェア技術者のスキルを評価するために資格の取得を課している企業も増えています。筆者の周辺でも、評価の基準に含めている企業が多くあります。

本連載では、情報処理技術者試験や各種のベンダ試験などについて、それぞれの概要や位置づけ、特徴を紹介します。

これらの試験で出題される問題は、学習する過程で得られる知識を実際の仕事などに役立てられるよう考えられていることも多く、資格取得といったメリットだけでなく、新たな知識を得ることもできます。

筆者自身も1人のエンジニアとして多くの資格を取得しており、資格取得を通して学習できる技術領域や、その資格登場の背景や裏話などお届けできればと思います。

● 問題の更新も早く実践的な情報処理技術者試験

コンピュータを扱う人に対する客観的な指標を設け、会社や学校の教育水準を確保するという目的から、特定のベンダに依存しない試験として始まりました。試験の運営は情報処理推進機構（IPA）が行っており、延べ応募者数2142万人超、延べ合格者数314万人超、年間約40万人が受験する大規模な国家試験となっています。

ITパスポート試験の他にも基本情報技術者試験やエンベデッドシステムスペシャリスト試験など、全部で12の試験区分が設けられています。これらは主として情報システムの利用者をも想定した試験と、情報システムの開発者を想定した試験とに分けられます。

情報処理の仕事をするなら まずはITパスポート

ITパスポート試験の前身は、初級システムアドミニストレータという情報システムの利用者側を想定した試験でした。初級と言いつつ、当時はまだコンピュータが十分に普及していなかった背景もあり、易しい試験ではありませんでした。

ITリテラシーをより浸透させるため、初級システムアドミニストレータ試験を発展させた試験として2009年に開始され、2011年11月からは現在のCBT試

験（PCを利用した試験）に移行しています。

情報システムの利用者に向けた試験の中では最下位の試験であり、全ての試験区分におけるエントリー資格という位置付けです。情報処理技術者試験の中で定められたスキルレベル（レベル1～4まである）のうち、一番低い1とされています。

試験回数も多く難易度も高くないため、これから情報処理分野で仕事をしたい人に適しています。

● 試験内容

試験時間は120分、問題数は100問です。全て4択の中からの選択式となっています。ストラテジ系の問題が35問、マネジメント系が25問、テクノロジー系が45問となっています。

▶ ストラテジ系

企業活動と法務、経営戦略、システム戦略から出題されます。

▶ マネジメント系

開発技術、プロジェクト・マネジメント、サービス・マネジメント、システム監査から出題されます。

▶ テクノロジー系

基礎理論、アルゴリズムとプログラミング、コンピュータ・システム、技術要素（ネットワーク、セキュリティなど）から構成されています。

学校などで情報教育が浸透しているのを受け、高等学校の「情報1」に基づく内容に見直しがされました。プログラミングの思考力を問う問題が追加され、情報デザイン（UIデザインなど）、データの利活用の問題が強化されたようです。より学生が受けやすい資格となっています。

● 試験問題はこうして作られる

現在の制度では、試験問題は情報処理技術者試験委員会・情報処理安全確保支援士試験委員会で、作成、選定、チェックがされています。試験委員の6割以上は情報通信業に従事しています。逆に言えば、4割はそれ以外の業種の人が委員になっています。出題内容を見ると、情報処理分野にとどまらず、幅広い範囲から出題できる背景はこのあたりにもありそうです。